



いっぱいのお目なた





育ての心

自ら育つものを育てようとする心、それが育ての心である。

世にこんな楽しい心があるうか。

それは明るい世界である。

温かい世界である。

育つものと育てるものが、

互いの結びつきに於て相楽しんでいる心である。

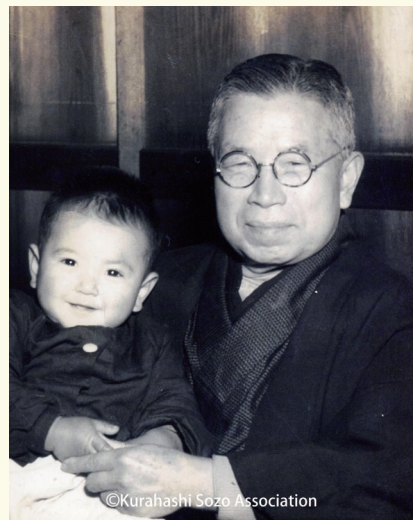
倉橋惣三

1882（明治15）年12月28日、静岡県生まれ。

「日本幼児教育の父」「日本のフレーベル」と言われています。

徳川幕府の旗本だった父の方針で、小学4年生の時、母とともに東京・浅草に上京、東京府第一中学校、第一高等学校、東京帝国大学と進学しました。

その後、日本の幼児教育の先駆けとなった東京女子高等師範学校附属幼稚園（現・お茶の水女子大学附属幼稚園）で長く主事（園長）を務めます。



大人が意図するものを教える教育を打ち破り、子ども自身の自発性を引き出す保育、誘導保育を提唱。昭和3年、5年、9年～12年の6年間にわたって、昭和天皇皇后両陛下に御進講を務め、その後、皇太子殿下（現上皇陛下）が小学校に上がるまでの2年間出仕を務めました。

また戦後は、行き場を失った子ども達のために「御近所幼稚園」を始めます。さらに、教育刷新委員会の委員となり、新しい日本の教育制度構築のために尽力しました。

1948（昭和23）年に日本保育学会の初代会長に就任。同学会は、今も活動が続いています。

また、現在でも発行されているフレーベル館『キンダーブック』と『幼児の教育』は、生涯にわたって編集に携わり、執筆を続けました。

1955（昭和30）年4月21日に永眠。この日は奇しくもフレーベルの誕生日でもありました。

倉橋惣三のことば

廊下で

泣いている子がある。涙は拭いてやる。
泣いてはいけないという。なぜ泣くのとは尋ねる。
弱虫ねえという。
……随分いろいろなことはいいもし、してやりも
するが、ただ一つしてやらないことがある。泣か
ずにいられない心もちへの共感である。

お世話になる先生、お手数をかける先生。
それは有り難い先生である。しかし有り難い先生
よりも、もっとほしいのはうれしい先生である。
そのうれしい先生はその時々的心もちに共感して
くれる先生である。

『育ての心』より

倉橋惣三が園長を務めていた幼稚園（今のお茶の水女子大学附属幼稚園）には長い長い廊下があります。その廊下は長いばかりか幅もなかなか広く、子どもたちがお店屋さんの机やら電車ごっこの線路やらを出して遊ぶ場所になるので、雨の日などは特ににぎやかです。

この日、園長室で執務をしていた惣三は、子どもの泣く声を聞きつけ、おやと廊下側の窓を開けてこの光景をのぞき見たのでしょう。「まあそんなに泣いて…どうして泣いているの。嫌なことをされたの？」と涙を拭いたりもしながら慰める先生の姿、そして、それを取り巻いてただ突っ立って何もしない子どもたちの姿。そんなありふれた大人と子どもの対照的な姿を、惣三は深く、少し斜めから観察しています。

有り難い先生は多いが「うれしい」先生は少ない。何もしないどころか自分も泣き出してしまおうような周りの子どもに比べると、大人は「心もち」を生きるのになんと苦手なのだろうと。

倉橋惣三協会 副代表理事
お茶の水女子大学 教授

浜口 順子

驚く心

おや、こんなところに芽がふいている。
畠には、小さい豆の嫩葉わかが、えらい勢いで土の塊を
持ち上げている。
藪には、固い地面をひび割らせて、ぐんぐんと筍たけのこが
突き出してくる。
伸びてゆく蔓つるの、なんという迅はやさだ。
竹になる勢いの、なんという、すさまじさだ。

おや、この子に、こんな力が。……
あっ、あの子に、そんな力が。……
驚く人であることに於て、教育者は詩人と同じだ。
驚く心が失せた時、詩も教育も、形だけが美しい
殻になる。

『育ての心』より

子どもは、好奇心の塊、驚く心のままに生きています。だから、大人が見過ぎてしまいがちな出来事の前で立ち尽くす子どもとられる、ということは、この上ない幸せだといふことができます。

子どもは、生活の中にある「謎」を見出し、その解明に乗り出します。「この穴に住んでいるのは誰?」「このマークって何?」と。そして、誰も降りようとしなない謎の階段を降りようとしたり、謎の物体に果敢にも手を伸ばしたりします。そんな子どもの姿に気づき、歩みを止める余裕がこちらにあれば、そこから物語は始まるのです。

「驚く人であることに於て 教育者は詩人と同じだ」という倉橋の言葉を胸に、今日もまた「驚かされたくて」子どものそばで過ごしています。

倉橋惣三協会 副代表理事
お茶の水女子大学
お茶大アカデミック・プロダクション寄附講座教授

宮里 暁美

子どもの目

いつも真正面から、真直ぐに相手を見る目。
いつもあからさまに自分をさらけ出して、心の隅まで隠すところのない目。
いつも一ぱいに見開いて、しっかり物そのものを見詰める目。いつも新鮮さに冴えて興味の人に輝く目。
いつも柔らかいなつかし味を湛えている目。
人の心の明るさを受けて明るく、自らもまた容易に、相手の心の中に溶けてゆこうとする目。

それよりもなお、なんとという清さに澄んでいることぞ。曇りもなく、濁りもなく、たとえばこの頃の澄んだ空の清さを、そのまま人界に落とし来たったような目。
それが、子どもの目である。

『育ての心』より

上の文章は『育ての心』に載せられた文章ですが、倉橋には次のような文章もあります。

「なんと美しい空であろう。紺碧に澄み通って、雲一つない。白い雲の影一つない。

ひろがりの大きい美に於いて、これ以上の美があるか。…

その秋晴れを、わたしといっしょに見上げている子どもの目に、ふと気がついて見ると、大空そのままの美しさが映じているではないか。……」

「秋晴」『短言—戦前』所収（倉橋惣三選集第四巻）

先日の、我が子の目が、まさにそうでした。

海辺の空をじっと見上げる我が子の視線の先には、雄大なトンビの姿。

「いつも新鮮さに冴えて興味の人に輝く目」「自らもまた容易に、相手の心の中に溶けてゆこうとする目」「この頃の澄んだ空の清さを、そのまま人界に落とし来たったような目」。子どもと生きていくと、人間を超えた生命（いのち）に生かされながら生きていくことを痛感します。そして、「子どもの目」は、そうした生命（いのち）を映じています。

倉橋惣三協会 副代表理事
大妻女子大学 専任講師

久保 健太

飛びついてきた子ども

子どもが飛びついてきた。あっと思う間にもう何処かへ駆けて行ってしまった。その子の親しみを気のついた時には、もう向こうを向いている。

私は果たしてあの飛びついてきた瞬間の心を、その時ぴったりと受けてやったであろうか。それに相当する親しみで応じてやったろうか。

後でやっと気がついて、のこのこ出かけて行って、先刻はと行ったところで、活きた時機は逸し去っている。埋めあわせのつもりで、親しさを押しつけてゆくと、しつこいといったような顔をして逃げていったりする。其の時にあらずんば、うるさいに相違ない。時は、さっきのあの時であったのである。

いつ飛びついてくるか分からない子どもたちである。

『育ての心』より

「パパ！ 見て 飛行機！」

「パパ！ 来て！」

飛びついて来ていない時でも、子どもの瞬間の心は日常であちこちに散りばめられていると思います。この惣三さんの言葉に出会っていなかったら、私はきっとこの瞬間の心を気にすることなく、スマホをいじっていたと思います。「活きた時機」をどのくらい捉えることができるか。この積み重ねが子どもとの絆を深めていくように思えます。

惣三さんの言葉は、子どもの無邪気な心に耳を傾け、その瞬間瞬間に寄り添う大切さを教えてくれます。日常の忙しさに追われても、彼らの純粋な声に気付き、共感し、驚きと喜びを共有すること。これが親子の絆を育む鍵であり、思い出を形成していくのに大事な心持ちとなるのではないのでしょうか。

倉橋惣三協会 専務理事
リモンライフ株式会社 代表取締役

池永 憲彦

子どもの心のはだ

どの子の手を握ってみても、頬を撫でてみても、かわりなきは、そのはだのやわらかさである。なかには、随分よごれているのがあっても、やっぱり、やわらかい。

子どもの心のはだも同じである。

それにしても、われわれ大人の心のはだのなんとあれていることか。自省に洗われ、道徳に彩られ、作法に塗られてはいても、心の地はだのなんと粗くなっていることか。時には自省と道徳と作法とでかえっておしろいやけがして、恐ろしい程がさがさになってさえいる。

子どものやわらかい手を握り、滑らかな頬を撫でる毎に、いつも思わせられるのは、さぞ、ざらざらした心地悪さを感じさせていることだろうということである。

それは、まあ、ゆるして貰おう。恐るるのは、心のはだの触れあいだ。子どもの、あのやわらかい心のはだに、われわれの此のがさがさした心のはだで触れることだ。

『育ての心』より

子どもは3歳までに全ての親孝行が終わるといふ。

笑顔で見つめられるだけで、またその肌に触れることで心がぱあーっと明るくなる。それだけで一生分のお返しができるほど、子どもの存在は尊く大きいものである。子どもの柔肌と同様に、心の肌はさらにきめが細かく、やわらかいものである。

子育て環境において、子どもの感情は無いものとして、大人が声を荒げ、遮っている風景をたまに目にする。

大人も不完全な生き物ではある。

が、子どものその瞬間の素直な気持ちは、近くにいる大人たちのその時の対応で良くも悪くも変わってしまう。

一人ひとりの心持ちをしっかりと受け止め、子ども達が目にしたものに純粹に興味を持つことができ、様々な体験を通して「やりたい」が実現できるような社会を創りたいし、目指したい。

子どもの心の肌の状況を大切にしながら。

倉橋惣三協会 専務理事
株式会社フォーハンス 代表取締役

熱海 正宏

人間の偉大さを

子供を偉大なものにこしらえ上げようというのではない。
この子供が偉大なものになることを信じて教育するのである。

この子が日蓮になるかもしれない。
この子がベートーベンになるかもしれない。
私は驚き後ずさりしてその子供を見る。

『幼稚園雑草』より一部抜粋

この言葉を読んで、ハッとしました。この子供が偉大なものになることを信じる——つまりその子の中に眠っている可能性を信じるということ。頭では、「なるほど」と納得しても、ついつい疑念がむくむくと沸き上がってきます。

「この子は大丈夫なのかしら」、「他の子に比べて遅れているのではないかしら」等と不安ばかりが先に立ってしまうのだと、先日も若いお母さんに相談されました。それどころか、「もし本当に可能性があるのなら、今のうちからビシビシ鍛えなくては！」という解釈になってきて慌てましたが、それくらい子どもを信じるということが、いかに難しいか……。

倉橋惣三が本当に子どもの可能性を信じていたことは遺された資料を読んでも、彼の子ども達の人生に思いを馳せても大変納得します。大人に信じられた子どもは、時に悩んだり、壁にぶつかったりしても、必ず自分の道を切り開いていくのだなと……。

作家
『倉橋惣三物語—上皇さまの教育係』著者

倉橋 燿子

母は教える前に慰むべき人である。導く前にいたわるべき人である。
家庭教育行脚の心は説く前に、まずいたわることである。
戒める前にまず察することである。
悩みを解決する前にまず共に語ることである。
語るよりむしろ聞くことである。
どの母でも、その子の母である。
家庭教育行脚の要諦は、その母にその子の母たる喜びと幸福とを感謝せしめることにある。
軽々しく理想の母を論じ、容易に賢母の範を示し、母を恥じしめ、母を苦しめてはならぬ。

『子供讃歌』より一部抜粋

母親学級、妊婦保健指導、訪問指導、育児指導…母子手帳を申請した直後から、母親は行政からさまざまな「指導」を受けることとなります。もちろん母子の健康と発育に大切な内容ではあるのだけれど、「指導」という上下関係を連想させる言葉が当たり前のように使われています。子育てをしながら議会という行政に近い場に身を置くなかで、ずっと違和感がありました。

この倉橋の言葉は、昭和初期に文部省の旗振りで全国各地に家庭教育に説いて回ったときのものです。理想の母を論じる前に、子育ての労苦を慰めいたわる。子育てに閉塞感を持つ人が多い現代にこそ、この視点が必要なのではないでしょうか。子育て支援、母子支援策を論じるときに、必ず思い出す言葉です。

倉橋惣三協会 監事

東京都議会議員

阿部 祐美子

会員登録案内

今、求められる惣三さんの子どもへのまなざし。

一緒に、子育てを語りあいましょう！

倉橋惣三協会では、随時会員を募集しています。

季刊誌『幼児の教育』（フレーベル館）を年間4冊お届けします。

また、会員交流会や研修など、定期的に開催中です。

一人では解決できない子育ての悩みを ざっくばらんに話せる交流会を開催中！

保育現場や、家庭での子育てにつながるヒントを見つけませんか。



会員申し込みページ

<https://www.sozo-kurahashi.or.jp/join/>

入会金 無料

年会費

一般会員 6,000 円

賛助会員 一般：10,000 円以上
法人：30,000 円以上

会員交流会

年間3～4回、会員交流会を開催しております。

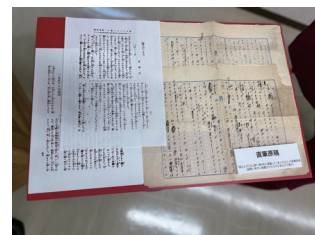
- ・研究者による倉橋惣三についての話
- ・会員さんの活動をご紹介
- ・倉橋家に遺る惣三の遺品を紹介 等

オンラインでの開催と並行して、
2022年にはお茶の水女子大学の一室をお借り
して、対面式の交流会も開催しました。

※写真右



※遺品の紹介



※遺品の紹介

また、子育て中の親御さんとの交流の場も実施
しています。

※写真左

会員の声

文京区長 成澤 廣修



私が倉橋惣三の名前を初めて知ったのは、今から10年前のこと。縁あって我が子がお茶の水女子大学附属幼稚園に入園した時のことです。園児の保護者に対して『幼児の教育』（フレーベル館）の購読が薦められ、その中で倉橋が「幼児教育の父」として紹介されていたのです。

既に私は文京区長の職にあり、幼児教育・保育の拡充と待機児童の解消が急務と感じていました。ちょうどその時、年1回の区内大学学長懇談会の席で、幼保一元化のこども園についてお話したところから大学と区との間で協議が進み、2016年4月に、国立大学の敷地内に初めて文京区立のこども園（当時の園長：宮里暁美氏）が設立されました。お茶大こども園が行うフォーラムを通して、全国にその実践が届けられているのは、設置者として喜びとするものです。

2023年4月には、「こども家庭庁」が発足しました。

文京区は、この間「子育てにやさしいまち」として知られ、児童数が年々増加しています。子育て支援は、ややもすれば保護者への支援に偏りがちになります。「こどもがまんなかの社会」とは、働き方改革によって保護者が長時間労働から解放され、子どもとともにいる時間が増えていくこと——。倉橋惣三協会の活動が、そんな地域づくりの一助となることを願っています。

こどもなーと代表 和泉 誠

「こころもち」

子どもは心もちに生きている。
その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、
子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。

...

その子の今の心もちにのみ、今のその子がある。

『育ての心』より



子どもの心もちがその子の言葉や、表情や、行為などで表出されることを表現とするならば、そこに目を向け、心を寄せることが重要なかもしれない。倉橋先生がアートを大切にされていたのは、子どもの心もちがそこにあると考えられていたのではないだろうか。

私は日々、0・1・2歳児の子どもたちと関わりながら、その心もちが表出されるのは特別な瞬間だけではなく、日常の中で安心して過ごす環境の中でより多く見られると感じています。身の回りのささやかな出来事、身近な世界を自分なりの感覚で感じることでその世界を広げて

いく。そのような子どもたちの姿に改めて「心もち」と言うものを感じ、そこにあるその子の姿を私なりに捉えたいと願い、でもなかなか捉えきれずにスルリとすり抜ける。その繰り返しが、私をより深く子どもたちの世界に引き込んでいく魅力なのかなと考えています。

神谷 睦代

「倉橋惣三と彫刻芸術」

筆者の専門は幼児造形表現です。また、大学生の時から彫刻の制作と発表を行ってきました。これらが結びついて、現在は倉橋惣三の芸術教育論について研究を行っています。

明治時代に恩物の「模型法」として、我が国の幼稚園教育に導入された粘土造形は、倉橋によって劇的な変化を迎えます。一言でいうと、そこに「表現」さらに「芸術」という観点が生まれたことでしょうか。一方、倉橋の「粘土製作」論の背景には、倉橋と同時代に活躍した日本近代彫刻の大家である建畠大夢や北村西望らとの交流も窺われ、倉橋の人脈の広さや本物志向には、この点でも驚かされます。

倉橋は、当時の小学校等における美術教育のあり様に危機感を持ち、子どもに真の粘土造形（「児童彫塑」）を受け取るために、芸術家らに応援を頼みました。このような彫刻芸術の本質から子どもの粘土造形教育を捉えようとした倉橋の理念は、そのまま自分の教育者・彫刻家としての課題に通じるものです。このことに気付いてから、恐れ多いとは思いつつも、倉橋は私にとって身近な師のような存在となりました。倉橋惣三協会の交流会等では、書物では知り得ない倉橋に関する貴重なお話等を伺うことができます。そのような機会をいただきながら、自らの研究や学びを深めていけることに感謝いたします。



倉橋惣三協会 概要



代表理事 倉橋和雄

代表理事	倉橋和雄
副代表理事	浜口順子 お茶の水女子大学 教授
副代表理事	宮里暁美 お茶の水女子大学お茶大アカデミック・プロダクション寄附講座教授
副代表理事	久保健太 大妻女子大学 専任講師
専務理事	熱海正宏 (株)フォーハズ 代表取締役
専務理事	池永憲彦 リモンライフ(株) 代表取締役
理事	倉橋麻生 (株)グッドバンカー 取締役
監事	阿部祐美子 東京都議会議員
顧問	副島洋一郎 元(株)博報堂常務取締役
特別顧問	松任谷正隆 音楽プロデューサー

所在地：東京都文京区小石川5丁目6-9-1007 info@sozo-kurahashi.or.jp

『子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である』

私の祖父—倉橋惣三は幼かった私にとっても、まさに私の心もちを汲んでくれる“ありがたい人”でした。

心もちとは気持ちのこと。いや、気持ちのもっと深いところにある思いかもしれません。言いたくても口に出せない時、そもそも自分がどんな思いでいるのか分からない時、近くにいる大人がそれを汲んでくれたり、触ってくれたりすると、どんなに嬉しいことでしょう。

保育の仕事とは何の関係もなかった私が、理事になってくださった皆様の、保育に対する熱い思いに打たれて立ち上げた倉橋惣三協会。これを機に、祖父が遺したものを今一度読み返してみました。それらに目を通していくと、様々な祖父の姿が見えてきました。一番確かだったのは、ひたむきなまでに子どもを愛する祖父の姿です。

今、子ども達を取り囲む環境は、コロナ禍を経て、さらに悪化しています。社会の闇はどうしても弱者に向けられてしまう。幼児虐待をはじめとする問題は後を絶たず、親も疲弊してしまっています。しかし、祖父が子ども達に向けた眼差しを、そして何故その眼差しが可能なのかを、倉橋惣三を通して多くの方に知っていただきたい。その思いは日々強くなってきます。子ども達は、この日本の、世界の、地球の未来です。その未来が輝くものになるように願ってやみません。

事実をもとに描く感動の物語

倉橋惣三物語

—上皇さまの教育係—

倉橋耀子 / 倉橋麻生 著・講談社



書籍の購入
amazon

子どもは自ら育つ——自発性を重視した倉橋惣三の教育が、いま求められている

遺された日記をはじめとする数々の貴重な資料から、倉橋惣三の素顔とその理念に迫る、実話をもとにした感動の伝記小説。“日本のフレーベル”“近代幼児教育の父”と呼ばれた人物の、波乱万丈の生涯とは。

倉橋惣三の生涯を、親族ならではの視点から描いた伝記小説『倉橋惣三物語』——。この本をインスタグラムでも紹介して下さった元プロ野球選手の斎藤佑樹さんが、倉橋惣三の魅力を語って下さいました。

斎藤佑樹氏が語る『倉橋惣三物語』

新しいことに果敢に挑戦していく惣三さんの姿が印象的でした。新しいことって、チャレンジしてみないとわからないことも多いし、怖くて足を踏み出せなかったりすることもある。だけど、その未知の領域を切り開いていく姿はカッコいいと思いますし、それは僕の好きな『ONE PIECE』というマンガの主人公ルフィみたいだなって。また、自分が知りたいと思ったことを徹底的に学ぼうとする姿勢に感動しました。人生って、死ぬまで何かを学ぶことが必要だと思うし、惣三さんの貪欲に学び続ける姿勢に「僕ももっと頑張らないと」と思いました。



教育ということに関しても、人に「教える」というよりは、自分の得てきたものを「共有する」「共感する」という惣三さんの態度に、「僕もそうありたいな」と思いましたね。

『倉橋惣三物語』は、幼児教育に携わる人だけでなく、ビジネスマンやスポーツ選手にとっても参考になる本だと思いました。そして、倉橋惣三の生きる姿勢は、子どもから大人まで、どの世代の人にとっても勉強になるし、学ぶべき要素がこの本に詰まっていると、僕は感じました。

■斎藤佑樹：1988年生まれ。群馬県出身。早稲田実業学校高等部3年時に夏の甲子園で優勝、早稲田大学進学後も活躍。2011年、北海道日本ハムファイターズ入団。2021年に現役引退。現在は「野球の未来づくり」をテーマに活動しながら、幅広い分野で活躍中。

活動紹介

■講演活動

- ・川崎市幼稚園協会 「夏期特別研修会」
- ・札幌市私立保育連盟「研修会」
- ・神奈川県私立幼稚園連合会「教育研究県央地区大会」
- ・茅ヶ崎市私立幼稚園協会「茅ヶ崎市幼稚園大会」
- ・広島県私立幼稚園連盟「教育研修大会」
他多数



■主な掲載

- ・全国私立保育連盟『保育通信』
「惣三おじさんと遊ぼう」連載（2022年度）
「保育者たちが語り合う」連載（2023年度）
- ・フレーベル館『保育ナビ』2021年9月号
座談会『幼児の教育』創刊120年に寄せて
- ・朝日新聞土曜版「be」はじまりを歩く
- ・中日新聞・東京新聞「書く人」
- ・東京新聞「笑顔と共に 子育て歳時記」連載
（2021年7月～1年間）
「ひとりで悩まない 宮里暁美の子育て相談」連載
（2022年7月～）



■『幼児の教育』企画・編集

1901（明治34）年に創刊された幼児教育雑誌。
2021年で創刊120周年を迎え、そのことを記念し、
120巻の表紙には創刊号のデザインを採用。
当協会も企画・編集として携わり、2021年春号より
内容を一部リニューアル。





—この小さな太陽達は、いつだって好天気だ。—
『育ての心』より

倉橋惣三は、子どもや保育者のことを「小さい太陽」と表現しました。
小さい太陽である子ども達の笑顔があふれて、いっぱいの日なたが広がる。
倉橋惣三協会は、そんな社会をめざし、貢献できるよう活動してまいります。

倉橋惣三協会

所在地：東京都文京区小石川5丁目 6-9-1007
info@sozo-kurahashi.or.jp



協会公式サイト
<http://www.sozo-kurahashi.or.jp>



公式 X (旧 Twitter)
<https://twitter.com/sozokurahashi>

LINEスタンプ発売中！

第1弾



倉橋惣三スタンプ第1弾

第2弾



倉橋惣三スタンプ第2弾